

ハマフエフキの種苗生産

藤本裕(仔魚飼育と中間育成) 金城武光*(親魚養成と採卵) 山本隆司(餌料培養)

本事業の詳細は昭和62年度沖縄県栽培漁業センター事業報告書に記載する予定であるのでここでは要約のみを記す。

1、目的及び内容

当センターの生産目標である20万尾を生産するため、今年度は従来の方法に加え初期餌料として人工プランクトンを使用し、更に飼育回次後半では当初収容卵を例年の2~3倍として種苗生産を行った。その結果、沖出し種苗を129千尾生産し、引続き中間育成後約44千尾を生産した。生産された魚は標識装着後放流用種苗として供した。

2、成果の要約

- 1) 親魚は前年度より継続飼育している19尾(平均尾叉長 61.63 ± 3.17 cm、平均体重 $3,790 \pm 590$ g、雌雄比不明)で、産卵は3月7日に始まり、終了は例年より約1ヶ月早い11月7日であった。
- 2) 総採卵数は約3億粒で前年に比べ約半数となった。春期の産卵はほぼ順調であったが夏期以降の産卵が激減した。
- 3) 仔魚飼育は室内円形50m³水槽3面と上屋付き50m³水槽6面の計9面(飼育水量420m³)を使用し、s型ワムシをベースにマガキ幼生、人工プランクトンを初期餌料として飼育を行った結果、約129千尾(平均全長18.0~24.6mm)を生産した。
- 4) 初期餌料として人工プランクトンを使用したところ、初期の生残率はs型ワムシ単独投与より若干良い結果となった。今後更に投与量、期間等について検討する必要がある。
- 5) 一水槽当り500万粒以上の高密度で卵を収容し飼育を開始したところ、日令10~20日の段階で各区共20万尾以上の仔魚が生残した。これは初期の生残率の低いハマフエフキのような魚の量産化を目指す場合の有効な手法として考慮する必要がある。
- 6) 中間育成は海面小割生簀を使用し82~106日間行った。その結果、約44千尾(平均尾叉長 $85.7 \sim 106.6$ mm)を生産し、生残率は34.6%(17.7~41.7)であった。中間育成中の生残率が50%以下になった原因は鳥による食害と餌料添加物の悪変による斃死と思われる。

3、今後の課題

- 1) 良質卵の大量採卵
- 2) 安定且つ高生残率となる初期餌料の探索
- 3) 中間育成中の生残率向上

* 水産試験場